



日本をたくもつ

自然素材を活かす伝統の技と知恵



古代から近世、日本建築の成り立ち

 東京国立博物館 [表慶館]
TOKYO NATIONAL MUSEUM

2020 12.24 [木] > 2021 2.21 [日]

事前予約制 (オンライン予約)

近代の日本、様式と技術の多様化

 国立科学博物館
National Museum of Nature and Science
日本館1階 企画展示室

2020 12.8 [火] > 2021 1.11 [月・祝]

事前予約制 (オンライン予約)

工匠と近代化—大工技術の継承と展開—

 文化庁
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

2020 12.10 [木] > 2021 2.21 [日]

入場無料



PRESS RELEASE

開催趣旨

日本の伝統建築は、木・草・土・石など多様な自然素材を優れた造形物へと昇華させたものと言えます。本展は、日本の建築を、高い美意識と加工技術を際立たせて縮小表現した建築模型、図面、道具など貴重な資料の展示を通して、自然素材を活かした造形的な特徴を古代から現代にいたるまで見ていきます。また日本の伝統建築の技は、「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」として、ユネスコ政府間委員会（無形文化遺産保護条約政府間委員会）にて、ユネスコ無形文化遺産として審議・決定が行われる見通しとなっています。

法隆寺国宝修理事業の一環として金堂および五重塔の模型を製作したことを契機に1960年から国の「模造事業」が始まり、1964年の東京五輪に併せて開催された「日本古美術展」にも日本建築の様式を伝えるものとして模型が出展されました。本展では、それらの模型に加え、原建物が国宝・重要文化財である模型を核として、これまで一般に公開されることのなかった貴重な建築模型などを一堂に集めて展示します。近世までの模型は、修理や復原の設計内容を検討するためであったり、国内で新たな様式を伝達するために製作されていました。近代の模型になると、万博など国外へ日本の建築文化を紹介するためや、意匠構造を理解するための教材であったり、修復によって得られた知見を記録、再現するために製作されるようになりました。

展示では、建築物の細部（柱や梁を組み上げ屋根を支える木組や建具など）や自然素材の特性（木材、漆喰、瓦などの風合い）を精巧に再現した1/10縮尺模型の展示をはじめ、木造建築を受け継ぐための伝統技術や工匠の技（檜皮・茅・瓦などの屋根葺き、左官、彩色、錆金具、建具、金箔など）についても紹介します。また、現在その維持が困難とされる伝承者養成・技能錬磨・原材料や用具の確保など、近年の取組みについても紹介します。

また本展は、「日本博」および「日本美を守り伝える『紡ぐプロジェクト』」の一環として開催します。つきましては、本展の周知にご協力賜れば幸いです。何卒よろしくごお願い申し上げます。

展覧会の特徴

〈古代から現代までの日本を代表する建物の模型や資料を一挙に公開〉

自然素材を活かす伝統技法と知恵が結集された「建築模型」や貴重な歴史資料である図面などを3つの会場でご覧いただくことで、日本人の暮らしや自然素材を活かした伝統建築の技と知恵が、今もなお受け継がれて、活かされていることを再認識していただけます。

〈建物内部の細部まで再現〉

東京国立博物館で展示する、近世までの建物の1/10模型には複数に分割できるものもあり、内側の細部まで鑑賞できます。室内の様子や天井裏などを含め、模型の内外に匠の技を発見できます。

〈ユネスコ無形文化遺産の認定を目指す「匠の技」を紹介〉

2018年にユネスコ無形文化遺産代表一覧記載への提案がなされ、2020年12月にユネスコ政府間委員会で審議・決定される見込みの「伝統建築工匠の技」（17件の国の選定保存技術）を、国立近現代建築資料館にて紹介します。

〈首里城正殿の模型を展示～首里城復興に向けて〉

2019年10月に首里城正殿は焼失しましたが、その1/10模型が沖縄県から出展され、東京国立博物館にて展示されます。この展示を通じて、首里城復興に思いをはせていただければ幸いです。

開催概要

名 称 日本のたてももの ―自然素材を活かす伝統の技と知恵

古代から近世、日本建築の成り立ち

会 場 東京国立博物館 表慶館 東京都台東区上野公園13-9 <https://www.tnm.jp/>
会 期 2020年12月24日(木)～2021年2月21日(日)
開館時間 午前9時30分～午後5時 *金曜・土曜日は午後9時まで開館
休 館 日 月曜日、2020年12月26日(土)～2021年1月1日(金・祝)、1月12日(火) *ただし、1月11日(月・祝)は開館
観覧方法 入館はオンラインによる事前予約(日時指定券)制です。詳細は展覧会公式サイトでお知らせします。
観覧料金 一般1,500円、大学生1,000円、高校生600円 *中学生以下および障がい者とその介護者1名は無料。
ただし、オンラインでの「日時指定券」の予約が必要です。入館の際に学生証、障がい者手帳等をご提示ください。

近代の日本、様式と技術の多様化

会 場 国立科学博物館 日本館1階 企画展示室 東京都台東区上野公園7-20 <https://www.kahaku.go.jp/>
会 期 2020年12月8日(火)～2021年1月11日(月・祝)
開館時間 午前9時～午後5時 *金曜・土曜日は午後6時まで開館
休 館 日 月曜日、2020年12月28日(月)～2021年1月1日(金・祝) *ただし、1月11日(月・祝)は開館
観覧方法 入館はオンラインによる事前予約制です。詳細は国立科学博物館公式サイト等をご覧ください。
観覧料金 一般・大学生630円(常設展示入館料)、高校生以下および65歳以上無料
*常設展示入館料のみでご覧いただけます。

― 工匠と近代化 ― 大工技術の継承と展開 ―

会 場 国立近現代建築資料館 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内 <https://nama.bunka.go.jp/>
会 期 2020年12月10日(木)～2021年2月21日(日)
開館時間 午前10時～午後4時30分
休 館 日 2020年12月29日(火)～2021年1月3日(日)
入 館 料 無料

主 催 文化庁、日本芸術文化振興会、東京国立博物館、国立科学博物館、読売新聞社
特別協賛 キヤノン、JR東日本、日本たばこ産業、三井不動産、三菱地所、明治ホールディングス
協 賛 清水建設、高島屋、竹中工務店、三井住友銀行、三菱商事
協 力 国立歴史民俗博物館、金沢工業大学
お問合せ 03-5777-8600(ハローダイヤル)
公式サイト <https://tsumugu.yomiuri.co.jp/tatemono/>



令和2年度日本博主催・共催型プロジェクト

*観覧料金は税込みの金額です。

*展示作品・会期・開館日・開館時間・入館方法等については、今後の諸事情により変更する場合がありますので、展覧会公式サイト等でご確認ください。

1

東京国立博物館 表慶館

古代から近世、日本建築の成り立ち

[構成] プロローグ～建築模型の世界 / 1. 仏教の伝来と建築の様式化 / 2. 交易の要と象徴 / 3. 神々への信仰と生活のかたち

建築の基本的役割は、人間を雨風や外敵から守ることで、古代の住宅は、地面に竪穴を掘り、掘立柱を立てて梁と桁で固定し、合掌型に丸太を組み、その上に屋根材を葺くシンプルなものでした。こうした手近な材料を用いた原始的な建築は、世界の各地にみられ、年代や地域によって多少の差はあるものの、おおむね似たようなものであったようです。

農耕文化の定着、社会階級の誕生、仏教の伝来といった社会的な変化は、建築物に象徴性や様式といった概念をもたらし、我が国の建築は、地域や気候といった自然による条件と、政治や宗教などの社会的条件に従いながら、変化と多様化を遂げてきました。宮殿、社寺、茶室、住宅（武家・農家・町家）、

城郭など、日本建築特有の造形を備えた多種多様なかたちが生まれ、そのままの用途で現在にいたる遺構も数多く存在します。

東京国立博物館では、文化庁が「模造事業」としてこれまで製作を行ってきた国宝・重要文化財の木造建造物の模型の展示を通して、古代から近世までの日本建築の成り立ちを紹介します。自然素材の中で加工性に優れ、かつ強度が高く、日本の四季に合わせた木材を活用し、組み上げる日本の伝統技法として受け継がれてきた木組などの大工技術、檜の皮を重ねて屋根を葺く檜皮葺や、榎、杉などの薄板を重ねて葺く柿葺など、古来より用いられてきた自然素材を駆使する伝統的な技と知恵を、模型を通じて鑑賞することができます。

〈1. 仏教の伝来と建築の様式化〉

飛鳥時代、仏教の伝来にともなって朝鮮半島や大陸から工匠の渡来と多様な建築技術がもたらされ、国内に数多くの寺院が建立されました。大陸由来の建築様式は、在来の建築形式や技法との融合によって様式化が進み、鎌倉時代以前の国風文化の中で生み出された「和様」、鎌倉時代初期に東大寺大仏殿を再建する際にもたらされた「大仏様」、禅宗の伝来によって導入された「禅宗様」が

用いられ、その後はこの3つの様式が寺院建築の基本形となります。

ここでは、法隆寺五重塔（奈良県/国宝）、大仙院本堂（京都府/国宝）、長寿寺本堂（滋賀県/国宝）などの模型の展示によって、塔婆、仏堂、門などの建物種別を時代順に紹介し、意匠や構造にみられる様式から「日本建築らしさ」を紹介します。



模型の断面

唐招提寺金堂 1/10模型

1963年 東京国立博物館蔵（原建物：奈良時代/国宝）

唐の影響を受けた奈良時代後期の様式を正規に表した名建築の模型で、明治時代の解体修理などの成果をもとに製作されました。



東大寺鐘楼 1/10模型

1966年 東京国立博物館蔵
(原建物:鎌倉時代 / 国宝)

鎌倉時代初期に僧の栄西が再建。模型は1965年から行われた解体修理にともない製作されました。

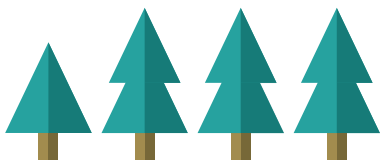
法隆寺五重塔 1/10模型

1932年 東京国立博物館蔵
(原建物:飛鳥時代 / 国宝)

半世紀に及んだ昭和の大修理に先立ち、修理監督である岸熊吉の指揮により模型が製作されました。

MEMO

原建物は7世紀建築の世界最古の木造建築と言われています。法隆寺昭和大修理（法隆寺国宝修理事業）に先立ち、修理前の記録・検討のため1932年に製作された法隆寺五重塔1/10模型が展覧されます。内部には塔本とうほん塑像そぼうも作り込まれています。製作者の工匠として、法隆寺に伝わる飛鳥時代の木匠の技を継承する「最後の宮大工」と言われた西岡常一氏（1908～1995）の名が模型に記されています。五重塔の主材である檜に焦点をあて、先人の知恵や工夫、自然との関わりについて記した西岡氏の名著『法隆寺を支えた木』（1978年）は、英語にも翻訳されました。



東福寺三門 1/10模型

1979年 国立歴史民俗博物館蔵
(原建物:室町時代 / 国宝)

室町時代建立で最古の禅寺三門の模型。1978年の解体修理の成果に基づいて製作されました。



MEMO

原建物は1405年建築の臨済宗東福寺派総本山の三門(三解脱門)で、桁行(間口)5間、戸口が3戸、両脇には



2階への階段となる山廊が付く雄大な二重門です。模型は解体修理の成果に基づいて製作され、修理に関わった人や工期などが記録された模型の棟札には、製作した工匠たちの名が見えます。伝統的な和様と大仏様と禅宗様が折衷した建物で、模型では柱に差し込んで軒を支える挿肘木(写真)を重ねる大仏様の特徴がよく見えます。

〈2. 交易の要と象徴〉

武家屋敷、町人地、寺社境内地などが城郭を囲むように立地する城下町は、政治・経済・文化の中心として安土桃山時代後期から江戸時代中期にかけて日本全国に誕生しました。多くの人が思い浮かべる天守台に代表される城郭のイメージは、この時期に築造されたもので、戦国時代に要塞として建てられた城郭は、徐々に領国の象徴としての存在に変わっていきます。

ここでは、交易によって城下町が栄えた松本城(長野県/国宝)と首里城(沖縄県)の2つの異なるタイプの城郭を紹介します。

松本城天守 1/20模型

1963年 東京国立博物館蔵
(原建物:江戸時代 / 国宝)

姫路城天守とともに五重天守の代表的建築の模型で、「日本古美術展」出品作です。



模型の断面





首里城正殿 1/10模型

1958年 沖縄県立博物館・美術館蔵
(原建物:江戸時代)

1932年の修理に携わった大工の知念朝永氏(1881~1959)が、太平洋戦争での焼失後、1953年に模型の製作を開始し、1958年に完成しました。*この作品は、平成館がイダンスルームに展示されます。

MEMO

原建物は尚敬王時代の1729年に建てられた琉球古建築の最大建築。2019年10月に焼失した首里城正殿の1/10模型が沖縄県から出展されます。戦前の首里城正殿の修理に従事した知念朝永氏が、沖縄戦で失われた首里城正殿や沖縄の建築文化を後世に伝えようと製作したものです。沖縄県外への出品は今回が初めてです。

〈3. 神々への信仰と生活のかたち〉

古くは巨木や山などを崇^{あが}めていたものが農耕社会では豊作を祈念するようになり、依り代^{よしろ}となった木や柱が建物に変化したものが神社の発祥であると考えられています。建物のかたちとしては、古来の住宅^{しきねんぞう}を連想させ、式年造替^{しきねんぞう}などによってそのデザインが今日まで伝えられてきました。そして、生活の場では、大陸からの影響や支配者層の生活様式に従って、寝殿造、書院造、茶室といった住機能・形式が誕生し、庶民においては、都市部では町家、農村部では農家に居住するようになっていきます。ここでは、神社本殿の形式を示す例として、仁科神明宮本殿(長野県/国宝)、春日大社本社本殿(奈良県/国宝)など、住機能・形式を示す例として、登呂遺跡竪穴住居(静岡県/特別史跡)、慈照寺東求堂(京都府/国宝)、今西家住宅(奈良県/重要文化財)などを紹介します。

春日大社本社本殿 1/10模型

1988年 国立歴史民俗博物館蔵
(原建物:江戸時代/国宝)

1976年の修理工事(第58次式年造替時)によって得られた成果をふまえて製作されました。

MEMO

本展には、「明治天皇大嘗祭宮院」の模型(明治時代)も出品されます。これは、1871年11月17日に皇居吹上御苑で営まれた大嘗祭の敷設模型です。大嘗祭は、新天皇の即位後に初めて行う新嘗祭^{にいなめさい}(国と国民の安寧、五穀豊穰などを祈る宮中祭祀)で、明治天皇の大嘗祭は、初めて東京で営われました。



今回出品する模型は、1883年に式部寮から東京国立博物館の前身である博物局へ貸し出され、大正の頃まで同館で展示されていたものです。同様の模型が、昭和のものは京都国立博物館、平成のものは皇居東御苑本丸休憩所に保管されています。

近代の日本、様式と技術の多様化

〔構成〕 1.西洋建築への理解 / 2.近代建築の思潮 / 3.新しい都市の姿 / 4.建築と自然、これから

明治時代になると、西洋建築の輸入によって煉瓦、コンクリート、ガラスといった新たな材料と意匠が現れ、建築模型も様々なものが誕生します。

国立科学博物館では、巨大化・複雑化する近代建築において、自然との調和や回帰を目指した多種多様な模型を紹介します。

建築模型は、古来において「様」または「本様」と表され、古代より用いられてきたとされています。近代以降の模型の製作目的は、時代とともに多岐にわたります。建物を建てる際の設計資料の一部とするためや、国外へ日本の建築文化を紹介するためなど、様々です。

〈1.西洋建築への理解〉

明治政府の樹立以降、西洋の社会制度導入にともない、議事堂、庁舎、学校、銀行、教会などといった新しい機能を持つ施設が技術・材料・技術者とともに輸入され、急速に普及していきました。招聘された外国人技術者は、技術の提供のみならず教育者としての役割も担い、日本人の建築家や技術者の育成が行われました。

第一国立銀行 1/50模型

国立科学博物館蔵
(原建物:明治時代)

江戸の町並みが残る中に誕生した洋風建築は、異彩を放ち東京名所にもなったと言われています。本模型は、後年の研究成果をもとに竣工当初の姿を復元しています。



MEMO

原建物は、耐火性と加工性に優れた大谷石（栃木県宇都宮市大谷で採れる火砕物の堆積によってできた石で、断熱性が高く、やわらかいことが特徴）がスクラッチレンガ（表面を掻いて溝の文様を施したもの）と対比しながら用いられ、温かい造形が特徴です。

〈2.近代建築の思潮〉

我が国が西洋的な建築手法を体得した20世紀初頭、欧米ではこれまでの様式主義への反発から様々な造形運動が起こり、機能や構造の合理性を追求する動きが盛んになっていきます。日本でも、留学経験のある建築家らがそうした運動に影響を受け、多様な造形が生まれ出されました。

帝国ホテル旧本館 1/200模型

株式会社帝国ホテル蔵
(原建物:大正時代)

20世紀を代表する米国の建築家フランク・ロイド・ライトによるもので、1967年の解体後、玄関付近の一部は、博物館 明治村（愛知県）に移築されました。

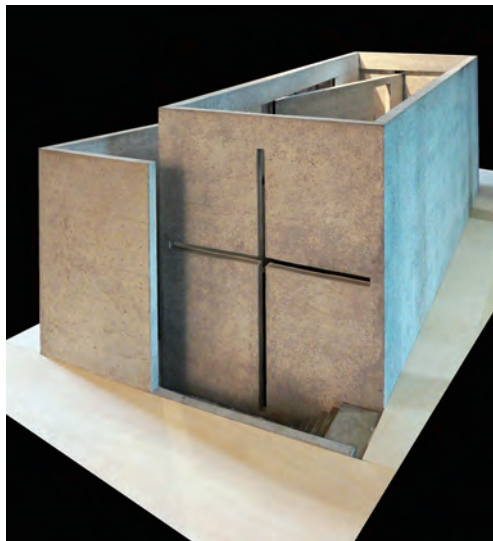
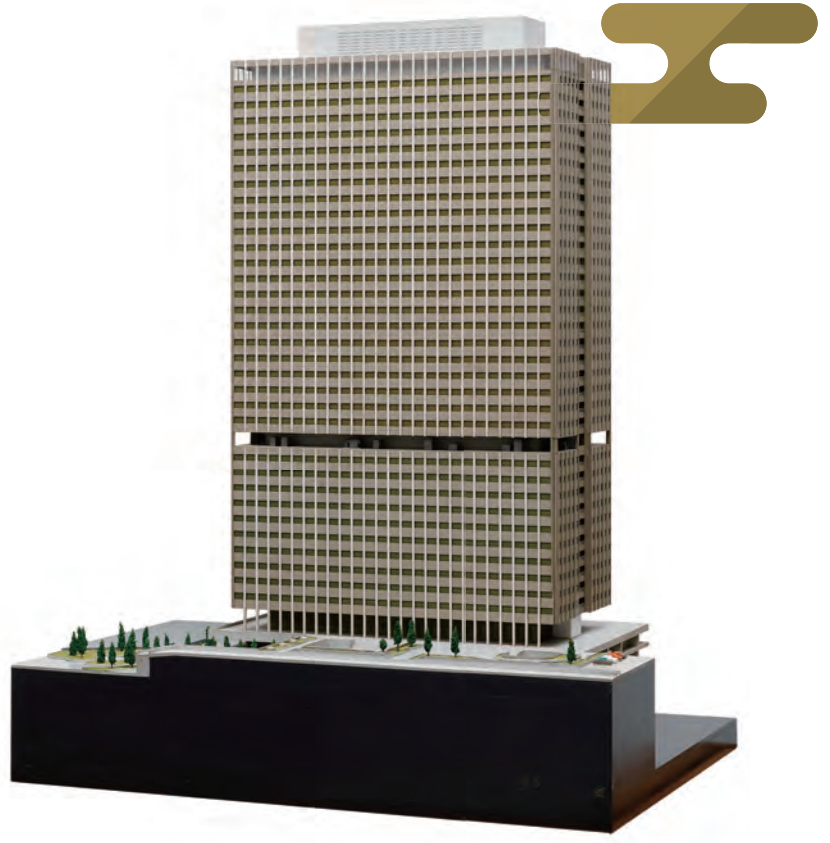
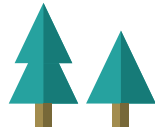
〈3. 新しい都市の姿〉

第2次世界大戦から終戦後にいたる建築統制を経て、1950年に建築基準法が制定され、ビル建設ブームが起こります。そして1963年の同法改正によって、それまで31mの高さまでとされていた建築物の規模が容積で制限されるようになり、建築物の高層化が加速し、新しい都市の姿が誕生します。

霞が関ビルディング 1/200模型

国立科学博物館蔵
(原建物:昭和時代)

地上36階、地上高147m。日本で最初期の超高層ビルとして知られ、地震の際は、揺れを吸収して受け流す柔構造が採用されています。



〈4. 建築と自然、これから〉

我が国の建築は、古来より自然とともにあります。外界との隔絶を図るシェルターとしてではなく、日差しや風の恩恵を活かして快適な居住空間を作ったり、時には地震による揺れや火災による延焼を制したり、常に自然との関係の上存在してきました。ここでは、建物と自然が調和した例として、日本人の自然観と美意識を集約した「京都迎賓館」と、自然との共生をテーマとする建築家、安藤忠雄氏の代表作「光の教会」を紹介します。

光の教会 1/10模型

安藤忠雄建築研究所蔵 (原建物:平成時代)

安藤建築で最もシンプルでミニマムな作品。自然光を用いた十字架による崇高な空間が、礼拝者のコミュニティを支えています。

京都迎賓館 1/100模型

内閣府迎賓館京都事務所蔵 (原建物:平成時代)

我が国を象徴する迎賓施設として、日本人の自然観、美意識、伝統技法、先端技術が集約されています。



MEMO

大屋根による深い庇が「縁」の空間となり、庭園と室内を緩やかに結び、建物と自然との一体感を創り出しています。車寄せの御影石、正面扉のけやき檜、室内造作の檜、襖や障子の和紙、かざりかなもの鏝金物、畳など、構造躯体を除く大半の部材は、日本全国から取り寄せた自然の素材が用いられ、室内装飾における壁画、調度品、飾り金具なども、四季や花鳥風月をモチーフにしています。

[構成] ユネスコ無形文化遺産「木造建築を受け継ぐための伝統技術や工匠の技」/ 近代の工匠技術

国立近現代建築資料館では、東京国立博物館の「古代から近世、日本建築の成り立ち」と国立科学博物館の「近代の日本、様式と技術の多様化」をつなぐものとして、大工技術を中心とした工匠の近代化について紹介します。

明治維新による近代化は、建築の西洋化とほぼ同じ意味を持ち、教育機関による「建築家」の養成、従来の棟梁や大工集団といった生産組織の再編によって建築の近代化が進められました。庁舎、学校、銀行といった近代に誕生した施設のみならず、寺院

や住宅においても、従来の工匠技術を用いた洋風の模倣から様式主義的なもの、実利性を追求したものなど、技術の発達とともに多様な近代化が図られました。また、ユネスコ無形遺産として「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が審議・決定されることにちなみ、近代に継承された大工技術に係る図面、模型及び大工道具などを紹介します。木造建築を受け継ぐための伝承者養成・技能錬磨・原材料や用具の確保など、近年の取組みについて紹介します。

〈1. 工匠の近世と近代〉

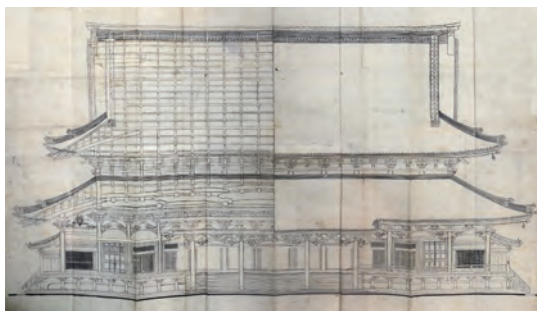
近代における工匠はどこから来て、どんな技術を有していたのでしょうか？我が国では、図面や模型をもとに建物を建てるという流れが中世の頃には確立していたと言われています。近代以前においては、立面図に相当する「^{たてじわり}建地割」などが高い作図技法と描法によって作成され、それらを作図する者と現場の棟梁や大工を含めて工匠と称しています。ここでは、模型、図面、技術書などの展示によって、近代に繋がる近世の作図技術を紹介します。



小田原城 天守模型

江戸時代 大久保神社蔵
(小田原城天守閣寄託)
(原建物：江戸時代)

細部を丁寧に加工していることから、製作当初から「見せる」ことを意識していたことがうかがえます。



東本願寺御影堂立面兼断面図

1890年代 滑川市立博物館蔵
(原建物：明治時代 / 重要文化財)

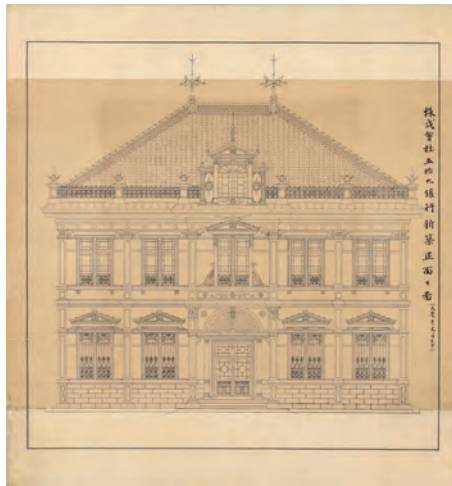
わが国最大の平面規模をもつ伝統木造建築です。屋根瓦17万5千枚、畳927枚という数からその大きさを実感できます。

〈2. 技能の継承〉

幕府・諸藩等に仕えていた大工家や棟梁らは、庁舎や学校といった新しい機能を持つ施設の建設需要に合わせ、新しい材料や構造の導入など様々な手法で西洋建築の手法を吸収し、擬洋風や和洋折衷などの様式を生み出してきました。こうした独自の西洋化は、それを担う工匠に確かな伝統技能が備わっていたことのあらわれであり、近世から継承された工匠の技術が建築現場において重要であることが改めて認識され、工匠自らが技術書を編纂したり、学校教育の場で日本建築史や伝統技法を教授することで、その継承に努めてきました。ここでは、京都東本願寺の再建で活躍した富山の工匠岩城家文書、伝統技法を学ぶための教本などを展示し、近代における日本建築の技能継承について紹介します。

〈3. 在野の大工〉

東京や大阪といった都市とは異なり、建築家の指導を得られる機会が少なかった地方では、主に近世から地域で活躍していた大工家の棟梁がその役割を担いました。近世から近代にかけての工匠技術を継承した伝統的な建築を建設する一方で、いわゆる擬洋風建築の役所や学校建築にも取り組みました。こうした地方における在野の大工が洋風建築の要素を取り入れる試みは、各地に残る大工文書から地方色とともに読み取ることができます。ここでは、愛媛県高松の大工久保田家、岐阜県揖斐川の大工内田仙司が残した図面などから洋風意匠・技術の導入に試行錯誤した様子を紹介합니다。



五十九銀行新築正面之図

1900年頃 青森銀行本店蔵
(原建物：明治時代 / 重要文化財)

太宰治の生家「斜陽館」を設計した堀江佐吉氏による設計です。

〈5. 伝統技術の記録と再興〉

明治政府による古社寺建造物の調査と保存修理にあたっては、詳細な実測図が作成され、それが学術と結びつき、建築史研究の基盤が整備されました。そして古代建築の知見と京都の建築技術を集積し、平安神宮が誕生します。近代的な建築手法の体得によって、これまでの伝統様式や技法と隔絶するのではなく、融合によって伝統様式や技法を生かし、後世に継承されるよう、多くの建築家が取り組み、成果を上げてきました。ここでは、実測図の好例「国宝・重要文化財建造物保存図」や平安神宮の図面展示によって、工匠としての建築家が伝統様式や技法を継承するために寄与した例を紹介합니다。



岩城庄之丈製図道具

明治時代 滑川市立博物館蔵

近世以前は筆や角筆を用いて描画し、曲線は薄板を小鉋で削った型板を用いました。

〈4. 新たなる挑戦〉

近世以前の大工家や棟梁は、今でいうところの設計・設計監理を担当する大工頭や御大工、現場で施工を担当する大工組や棟梁に大別され、家格によって職能が限定されていました。明治時代以降、これら多くの大工家や棟梁は、請負会社として組織化し、学校教育を受けた建築家を取り込むなどして、設計と施工を一式で請負う業態が誕生し、現在における建設会社の原形となります。ここでは、清水組、堀江組など規模の異なる工匠家について、高い技能が反映された請負業務の例を紹介합니다。



平安神宮蒼龍楼・白虎楼立面図

1890年代 平安神宮蔵(京都国立近代美術館寄託)
(原建物：明治時代 / 重要文化財)

平安遷都1100年を記念し、市民の総社として創建されました。古代を指向した独特の意匠が絵にも表れています。



「日本博」とは

総合テーマ「日本人と自然」というコンセプトの下、縄文時代から現代まで続く「日本の美」を国内外に発信し、次世代に伝えることで、更なる未来の創生を目指し、2019年からスタートしました。文化庁、日本芸術文化振興会、関係府省庁や文化施設、地方自治体、民間企業・団体等の総力を結集し、日本の美を体現する美術展・舞台芸術公演・文化芸術祭等のプロジェクトを、四季折々、年間を通じ、日本全国で展開していきます。



「紡ぐプロジェクト」とは

文化庁、宮内庁、読売新聞社が官民連携で取り組む「日本美を守り伝える『紡ぐプロジェクト』—皇室の至宝・国宝プロジェクト」は、皇室ゆかりの美術工芸品や国宝・重要文化財などの日本の美を未来へ伝え、世界に発信することを目的に、2018年11月にスタートしました。

本展に関するお問合せ先

「日本のたてもの」広報事務局 担当：平野、池袋

〒150-8551 東京都渋谷区渋谷1-3-9 ヒューリック渋谷一丁目ビル3F

TEL:03-3406-3419 FAX:03-3499-0958 E-mail:tatemono@ypcpr.com

